

社会科授業力の育成を目指す アクティブラーニングの適用とその評価

三 浦 和 美

1. はじめに

我が国において、教員の資質向上を図るため教員養成の枠組が4年制から6年制へと大きく変わろうとしている。そして、教育現場には、小1プロブレム・いじめ・不登校など多くの問題が山積している。また、学級崩壊も全学級の1割で起きているとされ、日々の授業を成立させていくことが難しい状況ⁱ（河上，1999）が続いている。さらに、文部科学省は、今年度新規採用者の依頼退職数が最大になったことを発表したⁱⁱ（2009）。このことは希望通り教職に就いても、現実の厳しさを乗り越えることが難しいことを示している。こうした近年の教育現場を巡る状況を受け、大学の教員養成課程においては、教員を目指す学生の授業力育成が喫緊の課題になっていると考える。

社会科に即して考えてもこの課題は同じであると考えられる。しかし、教員養成課程でどのような講義を行い、学生がどのような社会科授業力をつけていくのかといった研究は極めて少なく、その体系化も進んでいないと考える。さらに、小学生が社会科を好きと答える割合は男女とも約50%程度であり、全教科の中で最も低いというデータⁱⁱⁱがある。また、近年は社会科を研究教科として取り上げる学校も少なく、以前として社会科授業が活性化していない状況があると考える。そのため、社会科とは何か、子どもたちが意欲を持って学ぶことができる社会科授業をどう創造していくかといった課題に応える社会科教育法の講義内容の構築が必要であると考えられる。

このような問題意識を背景にして、2年間小学校社会科教育科目の講義改善の研究を行ってきた。これまで学生には、社会科が苦手あるいは社会科は暗記教科だといった固定観念が根強くあった。しかし、講義改善の研究を通して、学生が持っていた社会科に対する意識を変え、社会科授業の構想力を高めながら初めての教育実習へつなげていくことができた（三浦，2007^{iv}，2008^v）。

そこで、これまでの研究にアクティブラーニングの考え方を適用し、さらに講義改善を図っていきたいと考える。アクティブラーニングは、元々アメリカの大学で学習者主体の講義を目指すために編み出された方法である。学生に能動的な動機付けを図り、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称として注目されている（林^{vi}，2009）。これを日本で教員養成課程に適用する理由は、2つある。第一に、学生が受身の立場ではなく学習の主体者となるようにするためである。それは、従来の一方向的な講義方法では、学習者として学生の主体性を十分に

育てることができないと考えるからである。第二に、こうした講義を体験することで、教員となって現場に出た際に、児童が主体となる授業の創造が可能になると期待するからである。

ここでは、今年度前期実施する必修科目「社会科の指導法」にアクティブラーニングを適用し、その効果について考察していきたいと考える。この講義改善を通して、社会科授業力の育成について実践的に研究することを目的とする。

2. 研究の計画

2.1 研究のねらい

昨年度の講義にアクティブラーニングの適用を行い、講義改善を行う。またその評価を多角的に行い、学生の変化を分析することで、その効果について検証していく。

2.2 実践対象

東北福祉大学 子ども科学部学生 57名

2.3 実践期間

2009年4月から7月 15回講義（1回の講義は80分）

2.4 研究の方法

- (1) 受講生にアクティブラーニングをさせるための工夫
 - ・学習指導要領と教科書の関連の理解—教科書の分析
 - ・ミニ授業の実施
- (2) 工夫した効果の評価
 - ・ミニット・ペーパーによる評価
 - ・事後アンケート（第14回目）

3. 研究の方法

3.1 事前アンケート（受講生を知る）

昨年度社会科概論を受講した学生（98名）のうち57名が引き続き受講している。社会科の誕生の経緯や目標についての講義は受講済みである。そこで、社会科指導法前の学生の実態を把握し、受講生を知ることから始める。アンケート項目は①教員を目指しているか ②この講義に望むことは何かの2つとする。

3.2 講義サイクル作りと講義毎の評価方法

学生が主体となって学習を進めることができるように、講義のサイクルを作った。これは、①講義内容を改善する→②講義評価（講義毎にミニットペーパー使用）→③講義評価の還元をする（ミニット・ペーパーの分析を翌週学生にフィードバックする）という循環型のサイクルである。また、この講義サイクルについては図示したプリントにして学生にも提示した。

前年度までは、講義内容の評価としては講義に対する感想をワークシートに書かせていた。しかし、自由記述式の感想だけでは、講義内容に対する客観的な評価を得ることができないと考えた。そこで、他大学で使用されているミニット・ペーパー^{vii}を参考に、社会科の指導法のミニット・ペーパーを作成した。これを毎時間講義終了前に使用するようになった。

ミニット・ペーパー 社会科の指導法	
学籍番号	氏名
今日（ 月 日）の講義のポイントと疑問な点	
講義の振り返り	よい←・・・→悪い
1 講義の理解度	5 4 3 2 1
2 講義への参加態度	5 4 3 2 1
教師の評価	よい←・・・→悪い
1 情熱はあるか	3 2 1
2 講義の質はよいか	3 2 1
3 講義の量はよいか	3 2 1
4 話し方はよいか	3 2 1
5 板書や視聴覚機器	3 2 1
東海大方式を参考にして作成	

図1. ミニット・ペーパー

評価項目は学生側と教員側の2つである。

学生の自己評価

講義の振り返り

- 1 講義の理解度
- 2 講義への参加態度

教師への評価

- 1 情熱はあるか
- 2 講義の質はよいか
- 3 講義の量はよいか
- 4 話し方はよいか
- 5 板書や聴覚機器

評価は学生の項目が5段階、教師の項目が3段階で行う。

3.3 アクティブラーニングの適用

アクティブラーニングの適用に当たっては、次の5箇条^{viii}が条件として示されている。

- 1 聞く
- 2 見る
- 3 議論・質問する
- 4 応用する

5 教えることにより、効果的に学習する。

この講義においては、次の2点について学生の能動的な学習を構成することとした。第一に、学習指導要領と教科書の関連とその分析を行うためワークシートを作成し、活用することである。第二に、指導案作成で終了していた昨年度の講義内容をミニ授業の実施まで行うことである。以下にその具体的な計画について述べる。

3.3.1 学習指導要領と教科書についての学習方法の転換

昨年度は教科書の解説を全て筆者が行った。学生からは分かりやすいとの評価を得たものの、教師中心のため学生は受動的な学習に終始した。そこで、今年度は指導要領と教科書の対応と分析を主体的に学習できるワークシート集(テーマ「スタンダードからオリジナルへ」)を作成した。学生が教科書というスタンダードから自分なりの工夫をしてオリジナルの授業作りを行う支援になるように考え、計画した。このワークシート集は、小学校で使われている教科書^{ix}を導入—展開—まとめの3段階で分析していくことができるよう構成した。第3学年から第6学年まで4年間分の単元を全て一人で分析できる冊子(全16ページ)を予め作成し、受講生全員に配布することにした。毎回各自が講義前に自習することを課題とした。さらに、毎回の講義ではグループ活動を取り入れ、話し合いと意見発表を行うようにした。15回の講義内容は下記の通りである。

3.3.2 ミニ授業実施と相互評価の設定

表1. 社会科の指導法 講義一覧(2009年度)

回	2009年度 講義内容	講義改善の視点①②
1	講義の方針・事前アンケート	① ワークシート集の活用とグループ活動を第4回～第11回まで行う。
2	年間計画の立て方	
3	特色ある年間計画	
4	3・4年上 教科書解説	
5	3・4年上 教科書解説	
6	3・4年下 教科書解説	
7	3・4年下 教科書解説	
8	5年 教科書解説	
9	5年 教科書解説	
10	6年上 教科書解説	
11	6年下 教科書解説	
12	指導案作成	「優れた授業実践のための7つの原則」を読む・指導案作成(自宅課題) ② 授業を行う・相互評価を行う
13	ミニ授業の実施	
14	事後アンケート・授業評価	
15	指導案及びレポート提出	

本学の場合3年次に公立小学校で4週間の教育実習を行うことになっている。教育実習を控えた学生が指導案の作成とその実施について学ぶ段階は、授業力育成の点で重要であると考えられる。

昨年度初めて教育実習に出た学生は授業への構想力を高め、社会科授業等各教科の授業に取り組んでいた。この教育実習をさらに意義あるものにしていくためには、実体験として授業体験が必要になってくると考える。教えられる立場から教える立場への転換は、教育実習前に体験しておくことが望ましいと考えるからである。さらに、限られた時数で子どもたちの教育に当たっている教育現場では教育実習生とは言え、より実践力のある学生を求める傾向は強いと考える。こうした学生や教育現場のニーズに大学として応えて必要性があると考えます。

そこで、今年度は作成した指導案に基づいて、実際に模擬授業を行う計画をした。そのため、昨年度は指導案作りに2時間を使用したのが、今年度は指導案作成の2時間のうち1時間目を指導案作成とし、2時間目を模擬授業の時間とした。授業は一人10分間で、相互評価はグループ討議で5分間とする。授業を受けた学生からのフィードバックがあることで、さらに能動的な学習が高まっていくことをねらいにしている。

4. 結 果

4.1 経過

第1回（4月13日）

事前アンケートでは、受講生を知るために教職の希望の有無について聞いた。教職の希望は受講生57名中であるが54名、ないが1名、決めていないが2名であった。受講生全体としては教職への希望は高い学生が多いと言える。また、この講義に望むことについて聞いた。学生は下記のような具体的な疑問や期待を持って講義に望んでいることが分かった。

〈事前アンケートの記述〉

- ・子どもたちが社会科を楽しく学ぶためには教師はどのような授業の準備をし、どのような発問をし、どのような展開をしていくべきなのかを学びたい。
- ・ずっと印象に残り、社会科を好きにできるような指導の仕方を積極的に学んでいきたい
- ・実践的な活動がしたい。
- ・自分自身社会科が苦手なので、その苦手意識をどうやって子どもに持たせないかを理解できるようにしたい。
- ・今後の自分の力に出来るように基礎・基本をしっかりと身につけたい
- ・実践力を身につけたい
- ・社会科の授業の進め方が分かる
- ・指導案が書けるようになりたい

アンケートに書かれた意見を発表し合いながら、この講義の目標や方針について学生とともに確認を行った。それは講義そのものが学生と教師にとって一方的なものではなく、双方向性があ

ることを示すことにもなった。

第2～3回（4月20日～27日）

社会科授業実施に当たって柱となることに年間指導計画作成がある。このことについては出身小学校での聞き取り調査を行い、校外学習の6年間分の一覧表作成を行った。小学校の地理的社会的条件を分析し、地域の実態を把握していった。学生は積極的にこの聞き取り調査を行い、自分の地域の特性と各学校での実践の特色について理解することができた。特に、近年修学旅行の実施に学校の特色が出ていることに気づくことができた。また、各学年を通して社会科が小学校の活動の中で果たしている役割についても改めて考えることができた。

第4～11回（5月11日～6月29日）

学生に対する能動的な学習機会として教科書の分析については全8時間実施した。毎回事前に分析を行うことを課題としたが、右図に見られるように各自分析を行ってきた。講義では各自が分析した内容についてグループで話し合いを行い、学年のポイントとなることを発表した。その後教員が学習指導要領と合わせて解説を行い、各学年の社会科授業について講義のまとめを行った。

小学校社会科 学習指導要領理解
スタンダードからオリジナル授業構想のためにI 3・4年

第3学年（60時間） 第4学年（75時間）
太字：大単元
細字：小単元

教材研究を受講している学生は後期も使います。折に触れて見つけたものがあれば記入しておく。

単元名 時数	教科書の教材 活動・表現活動の例	オリジナル教材収集
1 わたしたちのまち みんなのまち 22	◎ 導入 町（イスト）の歴史をたどる（見本） 展開 町（イスト）の歴史をたどる（見本） まとめ 町（イスト）の歴史をたどる（見本）	町（イスト）の歴史をたどる（見本） 町（イスト）の歴史をたどる（見本） 町（イスト）の歴史をたどる（見本）
◎ 1 もっといろいろ知りたいね 学校のまわり 11	◎ 導入 町（イスト）の歴史をたどる（見本） 展開 町（イスト）の歴史をたどる（見本） まとめ 町（イスト）の歴史をたどる（見本）	町（イスト）の歴史をたどる（見本） 町（イスト）の歴史をたどる（見本） 町（イスト）の歴史をたどる（見本）
2 市のようす 10	◎ 導入 町（イスト）の歴史をたどる（見本） 展開 町（イスト）の歴史をたどる（見本） まとめ 町（イスト）の歴史をたどる（見本）	町（イスト）の歴史をたどる（見本） 町（イスト）の歴史をたどる（見本） 町（イスト）の歴史をたどる（見本）

図2. ワークシート（教科書分析）

毎回取っていたミニット・ペーパーには、学生からの質問が書かれていた。それを集約して翌週に全体に還元するようにした。その内容を一部紹介する。

ミニット・ペーパーの活用事例 第9回 講義（6月15日）に対する疑問と回答

学 生：5年生の教科書はより広い視点から現代社会を見つめていくということが分かった。

わたしたちの生活と環境 ここでは鴨川を取り上げていましたが、実際には自分の身近な河川で学習するのですか。ここの分析はどうすればいいですか？ 鴨川で分析していいのでしょうか？

回 答：5年生は日本全体の学習です。仙台から離れているから扱わないということでは子ど

もたちの視野はいつまでも広がりません。地図を使って「鴨川はどこかな」と問いかけることです。琵琶湖の清浄化については国・自治体・住民の3者が力を合わせて実現したものです。(略)自分の地域の川を扱うとしたら「総合」で行うことです。社会科は社会科として鴨川や日本全体の河川の汚染について考えていくのです。5年生が扱う地域は「日本」これをしっかり頭に入れてください。仮に地域の川をきっかけにしたとしても視野は日本に広げる。指導計画もおのずと出来上がってきます。

このミニット・ペーパーに答えてのプリントは全部で7回発行した。学生からは「講義の復習にもなるし、他の学生の意見を聞くことができるのでとてもいい」という意見があった。このサイクルは学生にとって互いの学び合いの場にもなったと考える。

第12～14回（7月6日～7月16日）

指導案作成に当たってはサンプルとなる指導案を提示し、説明した。ここで作成する指導案は単元名・目標・指導過程・評価・板書の5つで構成される略案である。また、「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」⁹の論文を配布した。7つの原則は下記の通りである。

- 1 学生と教員のコンタクトを促す
- 2 学生間で協力する機会を増やす
- 3 能動的に学習させる手法を使う
- 4 素早いフィードバックを与える
- 5 学習に要する時間の大切さを強調する
- 6 学生に高い期待を与える
- 7 多様な才能と学習方法を尊重する

この原則は米国高等教育学会の研究グループによって開発され、主にアメリカの大学^{xi}で活用されているものである。能動的な学習の実現は小学校の授業創りにも欠かすことができない。そこで、学生にはこの原則を解説し、自分の授業でも意識して実践してみるように促した。



写真1. 授業の様子（グループ）



写真2. 授業の様子（全体）

授業に際しては、写真2にあるように60名近い受講生が交代で授業ができるよう、4人で1グループとし、教室全体を使ってグループ活動を実施した。

学生が初めて作成した指導案には、図3にまとめたように実物の提示・写真・地図活用・ワークシート・活動などの工夫がされていた。特に、地図活用については今期学習指導要領改訂のポイントでもあることを講義でも取り上げた。この項目が授業の工夫として最も多く考えられたことは、学習指導要領の理解が定着していることの表れでもある。写真や実物といった視覚教材の使用も小学生の発達に即している点で望ましいことであると考ええる。また、3年生のくらしと商店の単元を扱った学生は、近くのスーパーで聞き取りした内容について写真を使用して解説していた。さらに、昔のくらしの単元を扱った学生は、教科書の拡大カラーコピーを用意していた。10分という短い授業時間だったが、初めての授業に自分なりの工夫をし、オリジナリティある授業を生き生きと実践することができた。また、事前に学習した7つの原則については、特に能動的な学習を意識した内容になるよう工夫が見られた。

授業後の相互評価では良かった点と改善点の2点でグループ討議を行い、意見を出し合った。相互評価の記述を以下に示す。

〈良かった点〉

- ・スーパーの写真を撮って提示したのがよかった。教科書にない細かな発見ができる。
- ・本物の稲の苗を持ってきて問題にするのがよかった。
- ・クイズやゲーム形式は関心を持たせることができる。
- ・身近なものを使っていたので授業に入りやすかった。
- ・視覚的に訴えているのがよかった。

〈改善点〉

- ・時間配分をもっと考えた方がよい。
- ・導入から展開への切り替えが難しい。
- ・子どもの反応にもっと答えた方がよい。

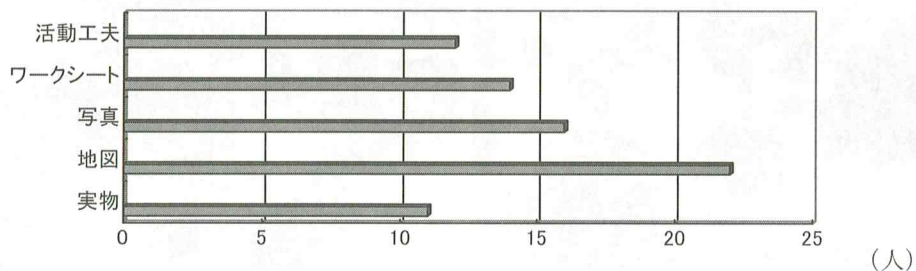


図3. 授業の工夫

- ・子どもの反応の予想が必要だった。
- ・分からない漢字が少しあった。

相互評価についてはグループ活動のため全体での共有化ができなかった。そのため翌週の第14回目に、各グループで記録したものを印刷し配布した。ここで示された良かった点や改善点は、これからの授業創りに参考になる事項であると考え。こうした教育技術に関わる知識についても実際に自分たちで授業を行ったことを通して実感として学ぶことができたと考え。

第15回（7月27日）

最終レポート（第15回）は「社会科の指導法で学んだことを基に、あなたが実践したい社会科授業について、5つのキーワードを使って述べなさい」（社会科の目標・年間計画・学習指導要領・学習意欲・地域の実態）を課題とした。レポートの記述から学生の変化について分析する。

学 生：社会科の授業において、私は具体的な体験から実感の伴う心に残る活動を展開していきたいです。教科書に書かれている内容の通りに授業を進めてしまうことは、自分も小学校時代に感じたように、子どもたちにとって苦痛にしかありません。（略）年間計画の内容に、子どもたちの学習意欲を引き出すことのできる要素がどのように含まれるかによって、子どもたちが受け止める学習の実感は変わってくると思います。

最終レポートでは、学生それぞれが講義内容を振り返りながら社会科授業への意欲的な姿勢が述べられているものが多かった。社会科の意義や本質を学ぶことがないままでは社会科の授業の活性化にはつながりにくい。まず、教員自らが社会科に対して興味・関心を持つことで子どもたちにもその楽しさや大切さを伝えることができると考える。そのため、この記述にあるように自分自身が子どもたちの学び意欲を引き出す方法を模索することやそのための努力を行うことが重要であり、こうした姿勢を学部段階で身につけておくことが社会科授業力育成の上で重要であると考え。また、小学校の社会科の授業は教科書を読んで終わったという経験しかない学生にとって、この転換は意図的に行われる必要がある。その意味で教育法科目講義の果たす役割は大きいものであると考え。

4.2 評価

社会科の指導法の講義内容に対して実施したアクティブラーニングの評価について、次の2つの視点から分析を行った。

4.2.1 ミニット・ペーパー結果

ここでは学生の講義態度について偶数回のデータを図4にまとめた。よくできた(5)とできた(4)と評価した人数を合計して示した。各学年の教科書の読解と解説では、最初の3・4年上の講義ではまだ教科書の分析に慣れておらず、学生も積極性があまりなかった。しかし、学年を

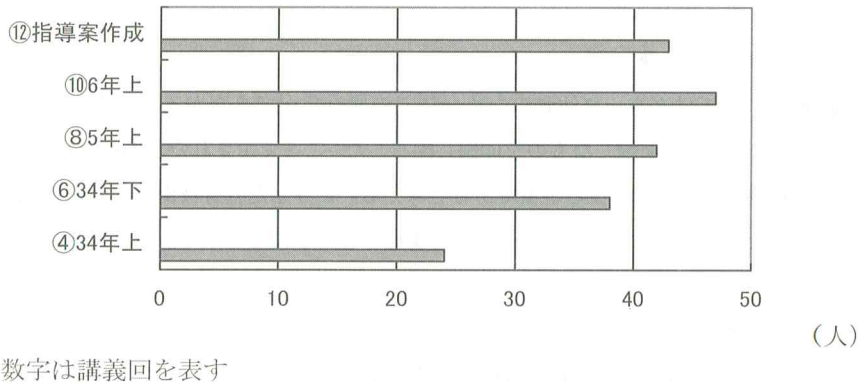


図4. 講義評価

追うに従って、講義態度が向上してきた。特に、6年の解説の時間が9割台になっている。これはワークシートの活用を考え、学生が主体となって学ぶことができる講義内容の構成が、学生の能動的な講義態度に反映されたためと考える。

4.2.2 事後アンケート結果

第14回に事後アンケート（自由記述）を取り、講義の振り返りを行った。そのアンケートの記述から学生の変化について分析する。

学 生：最初は導入・展開・まとめをどのように区別するのか、きちんと理解することもできませんでしたが、教科書・学習指導要領を使った学習によって、その区別や役割を理解することができました。また、それと同時に教科書や学習指導要領はあくまでベースであり、授業をコーディネートするのは教師なのだということを知ることができました。また、ミニ授業の作成と実施により、学習指導案の書き方や授業を行うということを経験できたことはとても大きいと思います。

自分で教科書を分析したり授業を作ったりする活動が続く講義は、学生にとっては負担の大きいものであった。しかし、その課題に取り組むことで、学生自身が学習の主体となって学んでいったことが分かる。また、次のように自分自身のものの見方を深める学生もいた。

学 生：教科書分析を通して学習指導要領の内容の理解が深まり、私にしかできない（私だけができる）ような社会科の授業作りをして実践していきたいと強く思うようになりました。また、そのために必要なことが分かり、日常生活の中で授業に使えると思う物を見つける（目を向ける）ようになりました。このようなモノの見方をするようになってからは私の周りの事物・事象の捉え方も変わり、教職を目指すことの大変さだけでなく、楽しさのようなものも感じながら生活を送ることができるようになりました。

した。

有田^{xiii}(1985)は社会科授業を行う上で「文字通り人の話、しかも多くの人の多様な話に耳をかたむけ、自然の声・社会の声に耳を傾けることが取材には大切ではないかと思う。」と述べている。社会科の授業はこのような教師の幅広い視野や姿勢を反映することが多い。また、社会科は私達が生きている社会のことを扱う教科である。そのため、この指摘にあるように教員を目指している学生も社会のことに目を向け、関心を持つことが社会科授業力の基盤になっていくと考える。

ミニット・ペーパーによる評価と事後アンケートの自由記述から学生が能動的に学習に参加していたことが証明された。これまで述べてきたように講義内容を学生が主体となるよう工夫し、アクティブラーニングを適用したことで学生の主体性が高まったと考えられる。さらに、今年度初めて個人ごとに実際に授業を行ったことで学生の授業に対する意欲は高まり、「社会科の授業っておもしろい!」という声も聞かれた。10分という短い時間でも精一杯授業作りに集中することができた。

5. まとめと今後の課題

本研究は社会科の指導法の講義改善を通して、社会科授業力の育成について実践的に研究することを目的とした。そのため教科書の分析を学生が主体的に行うことや作成した指導案を基にミニ授業を実際に行うことを主な改善内容とした。その結果は次の通りである。

- 1) 本研究で取り上げた講義改善は、ミニット・ペーパーの講義評価により学生の能動的な学習を実現するのに効果的であったことが示唆された。
- 2) 事後アンケートに書かれた学生の記述の分析からも前述の評価を裏付ける内容を得ることができた。
- 3) 教員養成課程講義科目におけるアクティブラーニングの適用は学生の主体性を引き出す効果がある。

戸田^{xiiii}(2007)は社会科教育研究の「学」的樹立には「社会科教育法」および「社会科教材研究」という大学講義の科学化、社会科教育実践の理論化、社会科教育研究の研究方法論の科学化および体系化という3つがあることを示している。こうした講義の科学化を進めることで社会科の目標を的確に理解し、社会科授業に意欲的に取り組む教師を育てることができると考える。そして、この大学講義と教育現場の連続性が小学校における社会科授業の活性化をもたらす要因になっていくのではないかと考える。

本研究で明らかになったように教員養成課程においてアクティブラーニングを適用することは効果があることから、今後も本学の学生の実態や社会のニーズに合わせて、積極的に計画・実施

していきたいと考える。さらに、小学校社会科教育法科目のティーチング・ポートフォリオを作成し、講義内容の体系化を図っていきたいと考える。

2006年創設の本学部から初の卒業生が、東北地方及び関東地方の小学校教員・特別支援学校教員として巣立つことになった。それぞれの地域や学校の実態に合わせた魅力ある社会科授業の実践に期待したい。また、学部段階で学んだことが教育現場でどのように活かされていくのか、学生の追跡調査を行い、社会科授業力育成の研究を継続していきたいと考える。

引用文献一覧

- i 河上亮二：学校崩壊，草思社，190-202，1999
- ii 文部科学省：「公立学校教職員の人事行政の状況調査」，2009年11月4日発表
- iii Benesse 教育研究開発センター：『第4回学習基本調査報告書』（小学生版），2008
- iv 三浦和美：「小学校教員を目指す学生の社会科授業力をどう育成するか」，東北福祉大学研究紀要第32巻，263-279，2008
- v 三浦和美：「小学校教員を目指す学生の社会科授業力をどう育成するか 2」，東北福祉大学研究紀要第33巻，419-431，2009
- vi 林 一雄：「アクティブラーニングに対応したラーニングスペースの動向調査」，日本教育工学会第25回全国大会 講演論文集，481-482，2009
- vii 香取草之助監訳：『授業をどうする！カリフォルニア大学バークレー校授業改善のためのアイデア集』，東海大学出版会，129，1995
- viii 東北大学：コースデザイン・ワークショップ冊子，「第2回アクティブラーニング」，8，東北大学高等教育開発推進センター，2009
- ix 東京書籍：『新編 新しい社会』3.4年上・下，5年上・下，6年上・下
- x 中井俊樹・中島英博：「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」，名古屋高等教育研究第5巻，283-299，2006
- xi 「Teaching at Stanford」：Center for Teaching and Learnig：2007
- xii 有田和正：『社会科の活性化』，明治図書，239-240，1985
- xiii 戸田善治：「日本社会科教育学会における社会科教育研究の「学」的樹立への動き—『社会科教育研究』創刊号から第20号までの掲載論文の分析を通して—」，日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.100，1-8，2007